

インドネシア  
スラウェシ島地震・津波から半年  
緊急・復興支援レポート



Save the Children

# 皆さまの支援が、たくさんのお子どもたちの命を守りました

## 迅速で大規模な支援を

2018年9月にインドネシア・スラウェシ島で発生した地震・津波の被災地で、皆さまからのあたたかい支援により迅速で大規模な緊急・復興支援を展開することができ、多くのお子どもたちの命を守ることができました。

セーブ・ザ・チルドレンは、いち早く被災地に到着し支援を開始し、生死を分けると言われる発災後数日間に、6,500人に緊急支援を届けることができました。さらに私たちは、ドンガラ県北部の孤立した地域で活動していた数少ない

組織でもありました。

震災発生から半年の間には、皆さまからの支援で、保健医療やシェルター、水と衛生用品を届けることができました。また、診療所や仮設校舎をつくるなど、14万4,999人(うち約半数は子ども)に支援を届けました。

発災直後から迅速で、大規模な支援ができたのも、皆さまからの支援のおかげであり、地震が起こってから半年が経過したこの機会に、感謝をお伝えするとともに、支援の成果を報告します。

## 皆さまからのご寄付でできたこと

私たちは、支援して下さったすべての人をインドネシアの緊急支援チームの一員だと考えています。



**350**人

のスタッフが  
現場で支援活動  
を行いました。



**72,874**人

のお子どもたちに  
支援を届けました。



**144,999**人

の人びとに支援を  
届けました。



## 「妹が生きていたのは奇跡です」 —支援によって助かった命

プリさん(9歳)が、夕方のお祈りをしようとしていたときに、地面が揺れるのを感じ、その直後に、心臓が止まりそうになるくらいの巨大な地震が起こりました。自宅は50メートル先に移動し、同時に、石の柱がプリさんの頭の上に崩れ落ちてきました。

プリさんは5時間ものあいだ、がれきの下敷きになっていました。うつ伏せのまま身動きができませんで

したが、唯一動かすことができた片手に石を握り、助けを呼ぼうと近くのがれきを叩きました。プリさんが下敷きになっている近くで、必死に家族を捜していた人が、暗闇の中で石の音を聞きプリさんをはがれきの下から引きずり出しました。

兄のデマスさんは「妹が生きていたのは奇跡だ」と話します。

## 皆さまの力で、 子どもの命を支える支援が実現しました

地震と津波により、およそ16万5,000人が自宅を失い、生活に必要な電気や水道といったインフラは破壊されました。被災した子どもたちとその家族は、風雨をしのげるような避難場所もなく、また、安全な水も手に入られず、いつ病気にかかってもおかしくないような環境にありました。

こうした状況の中、被災した人たちに対して避難先を探す支援や、衛生用品、蚊帳、安全な水を提供するなど、迅速に支援を届けました。さらに、避難先ですぐに必要な食料や衣料、薬などが購入できるように、数千家族に対して現金の給付も行いました。

災害発生から6ヶ月の間に10万3,317人に支援物資を届けました。



シェルターキット  
1万2,158セット



衛生用品キット  
2万885セット



浄水キット  
2万8,621セット



蚊帳  
1万7,542張

セーブ・ザ・チルドレンは、1万家族以上に現金給付をしましたが、特に、女性が家計を支えている世帯、障害者や妊産婦、授乳中の親がいる世帯、2歳未満の子どもがいる世帯を支援しました。

多くの家族は地震と津波により仕事を失ったため、若者が新しい仕事に就けるよう職業訓練の機会も提供しました。



## 「とても恐くて泣き続けました」 —マーゼラさん

大きな揺れに襲われたとき、マーゼラさんは、母親に髪を結ってもらっていました。周りの壁が揺れ出したのに驚き、家族は一斉に自宅から外に飛び出しました。マーゼラさんと家族は、2回目の大きな地震で自宅が倒壊する前に逃げ出すことができました。地震発生直後の大混乱の中、マーゼラさんは兄のオートバイの後ろに乗って避難しましたが、「とても怖くて泣き続けました」と話します。

自宅が倒壊したため、ひと月もの間、ジャングルの中に張った防水シートの下で生活しました。しかし、セーブ・ザ・チルドレンからの現金支給によって、生活に必要なものを購入するなど、少しずつですが、着実に生活の再建を進めることができるようになっていきます。現在、マーゼラさんは、学校の先生になるという将来の夢を抱きながら、学校に通っています。

# 子どもの保護

## 一皆さまの力で、子どもたちを危険から守りました

スラウェシ島で起こった地震と津波によって、大勢の子どもたちは自宅を失いました。そして、搾取や虐待、人身売買の危険にさらされました。そうした経験は、子どもたちに深刻な精神的苦痛をもたらしています。混乱の中で、家族と離ればれになった子どももいましたが、皆さまのご寄付により、そうした子どもたちを搾取や虐待などから守ることができました。

### 「こどもひろば」の運営

子どもにとって安心・安全な空間「こどもひろば」を52ヶ所運営し、9,700人の子どもたちを支援しました。また、常設の「こどもひろば」も23ヶ所開設しました。

### こころのケア（精神保健・心理社会的支援）

過酷な経験を乗り越え、日常を取り戻せるように、約9,200人に精神保健・心理社会的支援を提供しました。また、被災した子どもたちに精神保健・心理社会的支援を提供できるように、コミュニティに暮らす数百人へ研修を行いました。

### コミュニティ支援

コミュニティに子ども保護委員会を設置し、子どもたちの安全が守られ、子どもの権利について啓発活動を行えるよう地域のリーダーやボランティアの人たちに研修を行いました。

### 家族の再会支援

地震や津波から避難する混乱の中で家族と離ればなれになった子どもたちが、家族と再会できるように、家族の搜索と再会支援を行いました。

### 子どもの保護

緊急の「こどもひろば」：**52**ヶ所

常設の「こどもひろば」：**23**ヶ所

精神保健・心理社会的支援：**9,224** 人

子ども保護委員会：**6**つ

家族と再会できた子ども：**22**人



## 家族との再会 —リズキーさん

リズキーさん(7歳)が、家族と再会した瞬間です。リズキーさんは、津波から避難する混乱の中で、家族と離ればなれになってしまいました。一人ぼっちになってしまったリズキーさんは、恐怖のためにぼう然としていました。

自宅のがれきの中にいるリズキーさんを数人の学生が見つけた。社会福祉省へ連れていき身元登録をしてくれました。日に日に犠牲者が増えていく中で、リズ

キーさんはもう家族には会えないのではないかと、胸が張り裂けるような思いで生活していました。

2週間が過ぎたころ、セーブ・ザ・チルドレンが行った家族の捜索と再会作業によって祖母と父親の居場所が分かりました。現在、リズキーさんは、家族と一緒に安心・安全を感じながら以前の生活を送っています。皆さんからの寄付によって、リズキーさんは家族と再会し、震災前の生活に戻ることができました。

## 教育支援

### 一被災後も、子どもたちは勉強を続けることができました

災害などの緊急時、真っ先に影響を受けるのは教育です。子どもたちは学校に通うことや学習を続けることが困難になります。しかし、できる限り早く、子どもたちが勉強を再開できるようにすることは最も重要なことで、教育は、緊急事態にあっても、あるいは緊急事態だからこそ、子どもたちに未来への希望を与える力を持っています。

地震と津波が起こってから半年の間に、仮設の学習スペースをつくったり、校舎の修復、ペンや鉛筆、鉛筆削り、ノート、リュックサックといった学習用品キットを配布しました。多くの方の支援によってこうした支援を届けることができ、数千人の子どもたちが教育を継続することができています。

### 教育支援

仮設学習スペース：**26**ヶ所

建設中の仮設学習スペース：**10**ヶ所

仮設学習スペースで  
学ぶ子ども：**5,148**人

修理した校舎：**20**校

復学に必要な  
学習用品キット：**1,492**セット





## 「夢はシェフになること」

### —教育支援によって夢を追い続けることができたサルサさん

サルサさん(10歳)の生活は、地震によって一変しました。現在は、両親とともにプラスチックシートで覆われたシェルターに暮らしています。安全な水はわずかしか手に入らず、懐中電灯が唯一の明かりです。そして、居住スペースにはネズミが走りまわっています。サルサさんは、自宅を失いました。しかし、現在は、学習に必要な本や文房具、リュックサックなどの支援を受け、学校に通います。セーブ・ザ・チルドレンは、皆さまからのご寄付で、学用品の支援や、サルサさんが

通う学校を支援できました。

さらに、サルサさんは放課後に「こどもひろば」で行われている活動に参加し、同年代の子どもたちと一緒に過ごしています。「こどもひろば」について、『劇をしたり絵を描いたり勉強など新しいことをたくさん教えてもらえるので、元気でいられます』と話しています。

サルサさんの夢はシェフになること。皆さまからの支援で、夢を追い続けることができています。

## 保健・栄養支援

### 一赤ちゃんとお母さんの健康が守られました

地震と津波で数万人の子どもたちが自宅から避難を余儀なくされ、多くの子どもたちが、避難先で必要な保健医療サービスを受けることや、食料と安全な水を手に入れることができない状況にありました。大勢の家族は、仮設シェルターで避難生活を送り、衛生状態が悪いために、特に妊娠中の女性や新生児は、感染症などの病気に罹患する危険に晒されています。

#### 栄養

出産したばかりの女性1,200人以上と、250人を超える妊娠中の女性に、緊急下における幼い子どもたちへの適切な食事の与え方の研修を行いました。720家族に対して、指定された店舗で利用できるクレジットカードを通じた生鮮食品購入のための引換券を配布しました。

#### 保健医療

妊娠中の女性と授乳中の女性121人に新生児用毛布や肌着、子ども用せっけん、オイルがはいった新生児キットを届けました。また、1,150人の女性に、せっけんや生理用品が入ったディグニティーキットを提供するとともに、地域のヘルスワーカー146人に研修を実施しました。

#### 水と衛生

災害発生直後から市内から遠く離れた地域にも緊急支援として水を届けました。また、貯水タンクの設置や、浄水タブレットなどが入ったウォーターキットの配布を通じて7万7,000人以上を支援しました。また、感染症の流行予防のために数百個の非常用トイレを設置しました。

#### 保健・栄養支援

栄養のある食事について研修を受けた親：**1,202**人

個別の栄養カウンセリングを受けた妊娠中の女性：**252**人

妊産婦キットを受け取った人：**121**人

生理用品などが入ったディグニティーキットを受け取った人：**1,150**人

研修を受けたヘルスワーカー：**146**人

生鮮食料品の購入支援を受けた家族：**720**家族

浄水タブレットなどが入ったウォーターキット：**28,621**セット (**77,021**人)

非常用トイレ：**268**個

セーブ・ザ・チルドレンの水と衛生チームのディンダが、歌で覚える正しい手の洗い方を、小学校で教えています。



セーブ・ザ・チルドレンが長期にわたって活動できるのは、皆さまの力があるから。

### がれきからの再建 —スリさん

スリさん一家は漁業で生計を立てていました。夫のスヘルマヤさんは、素晴らしい技術をもった漁師で、スリさんは夫が捕まえた魚を売って生計を立てていました。しかし、津波によって、船や漁具、家、家財などのすべてが流されてしまいました。とてもひどい出来事でしたが、さらに困難な状況になっていたかもしれないと話します。

「津波が来た時、子どもたちは全員自宅にいました。私は、泣きながら子どもたちを捜しましたが暗くて、電気も止まっていた」  
スリさんは、必死に捜し回り、なんとか子どもたちを見つけました。しかし、当時、妊娠していた娘さんは、この時の体験から早産になりました。  
「かわいそうな娘。出血し、死んでしまうかと思いました」

セーブ・ザ・チルドレンは、皆さまからの寄付によって迅速に緊急支援を開始できたほか、被災した人たちやコミュニティーとともに、これから長い道のりとなる生活再建や、次に起こるかもしれない災害対策などの復興支援活動を行うことができています。



しかし、病院で出産することができたので、緊急の輸血を受けて赤ちゃんの命は助かりました」  
それから6ヶ月が経過しましたが、今も家族は仮設テントで生活しています。体を洗ったり、洗い物のための清潔な水は十分になく、毎日何とかやりくりして生活しています。  
家族を養い、子どもたちの通学費用をまかなうために、スヘルマヤさんは、建設の仕事に就き、スリさんは自家製のお餅を

売っています。  
地震や津波で被災した数千にのぼる家族が、スリさん一家のように、少しずつ元の生活を取り戻そうと日々奮闘しています。多くの皆様からのご寄付で、セーブ・ザ・チルドレンは、スリさん一家をはじめ被災した家族の生活再建のための支援活動をすることができています。



**Save the Children**

公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F  
[www.savechildren.or.jp](http://www.savechildren.or.jp)



2019.5.